
擬似恋愛

槻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

擬似恋愛

【Nコード】

N8804D

【作者名】

槻

【あらすじ】

どこか人と距離を置いてしまう主人公。人あたりはいいくせに、恋愛をしない男。一体彼は何を隠してる？そしてあたしは、何を求めてる？

1：プロローグ

彼女は、彼を好きだと言う。

彼は、彼女を好きだと言う。

夢のようで当たり前のコトが、どうしても信じられなくて、
好きになったって辛いだけで、
どうしたって何も変わらなくて、
そんな自分が大嫌いだった。

誰かが「恋に落ちたら負け」って言ったけど、そのほうがよっぽど
いい。

恋をしないのは、負けたくないからじゃない。
ただ単純に怖いだけ。

誰かに思われていない現実を知るのが、
どこか軽蔑している目で見られるのが。

もし誰かが、

あたしのことは愛してくれているのならば、

少しだけ抱きしめて

あたしが恋に落ちなくなるまで。

2：雨音と災難

その日は雨が降っていて、雨が道路やら窓を叩きつける音が校内に響いていた。

あたしは先生に頼まれた荷物を、生徒会室まで運んでいる途中のことで。

一箱、4キロはありそうなダンボールを顔の前で2つ抱えて歩く。女子にしたらそれなりの重さだと思う。

まあ、めんどくさくて2個いっぺんに運ぼうとしたあたしも悪いけど。

というか、あたしは委員長でも雑用係でもない。

あたしに荷物運びを頼んだ、我がクラスの担任多恵子先生こと「たえちゃん」いわく

「ホントはあの、クソ圭太に運んでもらう予定だったんだけどね。」らしい。

たえちゃんは、スタイル抜群な先生なのに言葉遣いはワイルド。

しかも、以前クラスの男子に「しわ増えた？」を言われたことをま

だ気にかけてるらしく
あたしが職員室に行くときまって、しわのこトを聞いてきたりする
可愛い先生だ。

そういったところが、あたしがたえちゃんを嫌いじゃない理由の
一つである。

だからすんなり、荷物を持っていくことを承認してしまったりした
わけだけど。

まあ『クソ圭太』がいないのなら仕方がない。
そんなことを思いながら階段を一段一段上っていった。

「……………どんだけこの階段多いんだよ。」

顔の前にダンボールがあるせいで上手く階段が見えないし、

ダンボールは重くて腕は、しびれてきてるし、
足も上手く動かないし。
やけに階段は多いし。

もう全部『クソ圭太』のせいにしてしまいたい。
してしまいたいっていうよりも、してしまおうのほう正しいのだ
けれど。

何度も階段につまづきそうになりながら、あたしはなんとか最後まで
一段を上り終えた・・・

ところだった。

「もう、いい！いい！」

突然、雨音の轟音にも負けないくらいの甲高い叫び声が聞こえてき
た。
そのすぐ後に聞こえた1つ乾いた音が、何かを叩いたことを告げて
いたけれど。

雨音。 叫び声。 叩く音。

この3つがあたしの足を、完全に止めた。
どうしようもなく、止まってしまったあたし。
そしてその直後に、一人の女の人が、生徒会室方面の方向から出てきた。

その瞳には、今にもこぼれそうなくらいの涙をためてながら前も見ず走ってくる彼女、そのちょうど進行方向にいたあたし。

あたしたちがぶつかるとは、ほんと1秒くらいのこと。

持っていたダンボールは、手からすべり落ち、
あたしは、尻餅をついた。

痛いという感覚より、何が起こったのかまだ把握しきれてないあたしは、
アホみたいに口をポカンと開けていたと思う。
なのに、ぶつかってきた彼女の方は、すぐさま体当たりしたくせにケガ1つなし。
すぐさま立ち上がるなり、またどこかへ駆けていった。

なんてついてない日なんだろう。

もう全部『クソ圭太』のせいだ！！

そうやって勝手に、人のせいにしてるとまた影から人が現れた。

もう勘弁してくれ。

座ったままゆっくり顔を上げるとそこには見たくない顔のヤツが立っていた。

2：雨音と災難（後書き）

初めまして。槻と申します。

未熟者なので誤字脱字等あると思いますが、頑張りますので、気長にお付き合い頂ければと思います。

3：居心地

所々茶色みがかった黒髪

ほんのり焼けた小麦色の肌

スラリと伸びた手足

その全てが『クソ圭太』を肯定していた。

「佐野さんか……。」

そう言って頭を掻きむしりながら、彼はこちらにやってきた。まるで見られたくなかった、と言っているように。

野村 圭太。

別に成績だって悪くはないと思う。

明るくて、誰に対しても優しいと評判の彼。

それゆえに、好きになってしまっ子も多いのだろっけねど。

誰にでも、平等に、同じだけの優しさ。

けれどあたしは、その優しさが苦手だった。

「ほら。」

そうやってあたしに手を貸してくれる。
座っていたあたしをゆっくりと立ち上がらせてくれて。

だけどそれも、平等な優しさ。
当たり前のように与えてくれる優しさ。

「ありがとう。」

なのに、嫌気がしなかった。

あたしが立ち上がると、アイツはもうすでにダンボールを2つ抱えていた。

ダンボールに書いてあった「生徒会室」の文字をみてか、どんどん足は生徒会室へ進んでいってしまう。

いとも軽そうに。

「あたしが持つよ。」なんて言ったって、どうせ聞いてくれないだろうと思って、

口から出そうになった言葉を飲み込んで、後ろをついて行く。

なんて勝手なヤツなんだ、と心から思う。

苦手なヤツ。

ムカつくヤツ。

だけど、少しだけ

コイツの優しさは、暖かくて、作り物じゃなくて、嬉しいと思った。

もっと。

もっと。

コイツの作る空気の中においてみたいと思った。

4：問い。

彼が生徒会室から出てくると、一緒に昇降口までいこうか。と誘われた。

断る理由のないあたしは、控えめに彼の後ろをついて歩く。

まるで、お母さんと子供みたいだ。

そう思ったけど、口にしないでおいた。

2階に下りる途中の階段で彼が、あたしを方を向いてこう言った。

「佐野さんって呼ぶとなんか他人みたいだから、まことって呼んでいい？」

あたしはもともと他人なのに、と思いつながら頷く。

きっと今のあたしの顔はニヤけているのかも知れない。

それを確認してか、また彼は口を開く。

「まじとってどっつこいんぞっ？」

「さんずいに、匂って言う字で洵^{まこと}。」

「へえー。いい名前じゃん。」

「そうかな？」

会話が途切れる。

雨が煩いおかげで、そんなに気まぜくはならなかったけど。

少しの沈黙が続いた後、彼はまた前を向いて歩き始めた。

ちょうど今彼が階段を全て下り終わって、昇降口まであと少しのところにいる。

それを見計らって、今度はあたしから声をかける。

「ねえ。」

「・・・ん？」

「おじぎの口で聞いていい？」

聞いていいのか、聞いちゃいけないのか、そんなことは分からない。
どうでもいい。

ただ単純に、会話を終わらせたくなかっただけで。

しばらく彼は、黙ってあたしの前を歩いていた。

昇降口まで来たところで、足が止まって彼があたしの方に振り返る。

「なに？」

聞いていいということなのだろうか。
分からなかったけれど、あたしは思い切って聞くことにした。

「さっきの子に告白されて、断ったんだよね？」

答えはない。

けれど、彼の顔がそうだと、言っていた。

「どうして？？」

これは、至って素朴な疑問だと思う。
告白した子は、うちの学校でも、顔よし、性格よし、で有名な子
だったから。

「メンドクサイから。」

どこか素っ気ない口調で彼は言う。
彼の瞳は確かにあたしを見ていたけれど、頭では他の何かを考えているようだった。

簡潔に。

でも何を隠してる？

どう頑張ったって、その答えをあたしが知る余地はない。

「じゃあさ、洵は好きな人いないの？」

あたしが言葉に詰まっていると、今度はあたしが質問された。

「いないけど。」

口からでたのは、紛れもない本心。

答えに迷う必要はなかった。

「どじりしてっ。」

きっと彼にとっては素朴な疑問。

けれどあたしが、その答えにつまったのは、言うまでもない。

4：問い。(後書き)

更新が遅くて申し訳ないです!!
もっと早く更新できたらいいのですが…;

5…ヤリコトの答え

『ヤリコト…』

どうして。

そんなコト、一度も考えた事なんてなかった。

どうして、あたしは恋をしない？
メンドクサイから？

…違う、そんな深い理由じゃなくて

怖い？

…怖くなんてない

怖くなんか……

「あたしは……」

その後の言葉がどうしても続かない。
答えなんて見つからないのかも知れないけれど、
頭の中で必死に理由を考えてる自分が居て。

「あたしは……」

一体あたしは何を恐れている？

頭の中で何かが疼く

心の底が空っぽになる

「もう、いいよ。」

その声をかけられて、あたしの意識が戻ってきた。

顔を上げれば、私を安心させるような彼の笑顔がそこにあって。

作り笑いなのは分かっている。

でも作り笑いなんかに見えなくて。

そんな風に彼に遠慮させている自分に少し腹が立った。

かといって、今のあたしが何かできるわけでもなくて。

「……ありがとう。」

小声でそう言って、あたしは彼の優しさに甘えることにした。

そのことに気付いているのか、いないのか、彼はそつとあたしの手を掴んで

「帰ろっか。」

そう言った。

昇降口から外に出ると、
幸い雨も小雨になっていてあたし達が困ることは無かった。

そしてあたし達以外に下校する人達はいなかったせいも、あたしが
恥ずかしい思いをすることは無かった。

けれど、下校中も彼はあたしとあまり話さずに前を向いたままで、あたしの手を引いて帰る彼の背中、少しだけ小さく見えた。

その彼の傷をあたしが知るのには、もう少し後のことだ。

5:どうしての答え(後書き)

本当に更新が遅くなって申し訳ないです…;

できるだけ早く更新したいのですが、私の都合で今週の更新も難しいです…;

いろいろ至らない部分もありますが、これからもお付き合いをお願い致しますm()m

6：誰も知ることのない最大の核

彼に送ってもらった翌日

あたしが昇降口で靴を履き替えていると、彼に出会った。

「おはよ。」

「お、おはよ。」

少々ぎこちなかったかも知れない。

でもあたしには、彼が声を掛けてくれたくれたことだけで満足だった。

「じゃあ、また教室で。」

そう言うと彼は、仲の良い友達と共に教室へ向かっていった。

あたしは、その背中が視界が見えなくなるのを待って、教室へと向かった。

+++++

「最近洵、圭太と仲良いじゃん？」

ちようどお昼休みに差し掛かるところで、

あたしの友人、由佳に声を掛けられた。

彼女の顔が、やけにニヤニヤしていてあたしは自分の顔がほんのりと熱くなるを感じた。

「違うし。」

彼女にまたひやかされないように、とあえて冷たく言い放つ。

ふーん、と曖昧な返事をした彼女は、あたしの机の横に座ってお弁当を開ける。

「でもさ。」

「何？」

あたしもお弁当を取り出そうと、自分の机の上にあるお弁当を見な

がら言い返す。

すると、由佳は普段彼女が見せないような真面目な顔になって、あたしに話しかける。

「圭太ってさ、元彼のこと引きずってんでしょ？」

その声は囁くように小さくて、誰かに聞かれることを恐れているようだった。

けれど、その声はあたしの中でこだますように繰り返された。

動作が止まる。

たった一瞬がとても長く感じる。

あたしの目はとっさに彼を探した。

……いた。

幸い彼は窓際の隅で友達と一緒にいて、あたし達とは正反対な方向にいた。

それを見て、あたしは安心したのか胸の鼓動が急に落ち着きを取り戻すのを感じた。

ほっとしてあたしが、由佳の方に向きなおると彼女があたしの方を心配そうに見ていたことに気付いた。

「大丈夫だよ。」

あたしは、小声で彼女に微笑む。上手く笑えているといいと願いな

がら。

「洵には悪いけど…。」

嫌な感じがした。

身構えるような。

冷や汗が伝うような。

「あいつだけは、好きにならない方がいいよ。」

由佳がそう告げたとき、あたしの全てが音を立てずに。

止まった。

7:このキモチ

「そ……うなんだ。」

あたしの口から出た言葉は、あたしの声なのかと疑うくらいに掠れていて弱々しかった。
なんでこんな声しか出ないのだろう。
明らかにあたしは動揺している。

「…やっぱ、そうなんじゃん。」

盛大なタメ息と共に吐き出された由佳の言葉。
その顔は苦笑いなのか、呆れ顔なのか、複雑な表情をしていた。

「……は？何が？」

考えるよりも早く口をついて出てきた言葉。
由佳が何を言っているのか理解できない。

何が、そうなの???

混乱しているあたしをよそに、やけに納得した顔でいる由佳が言った。

「だーから！」

由佳は、あたしに分かりやすく、一つ一つ教え込むような口調で説明し始めた。

……幼稚園児か、あたしは。

まだ善悪の分別も出来ない幼稚園児に、先生が一つ一つ宥めるように話しかけている様子が鮮明に浮かんだ。

由佳が大人なのか、あたしが子供なのか。

我ながら理解能力が皆無とっていいほど無い自分は凄いと思う。

「だからね、あんたはなんやかんやで圭太クンのことが好きなんじゃないってこと。」

「……………」

「ちょ、洵。話についてきてる??」

それこそ完全なる理解不能。

何、あたしが『クソ圭太』のことが好きだってこと？

なんで。

どうして？

あたしが、誰を？？

ぐるぐるとあたしの中で思考が巡る。

ただぼーっと立っているだけなのに、頭の中は修羅場っていつていくらいに物凄いスピードで思考が駆け巡っていて。

全くもって理解ができない。

アイツに抱いている気持ち、恋なのか。

それとも他の別の気持ちなのか。

「洵。」

由佳に今まで忙しく巡っていた思考がピタリと止まって、急に現実味を感じた。

「あなたはさ、いろいろ辛い思いをしてきたと思っけどな。」

「・・・うん。」

黙って頷くことが精一杯だ。

他人に気を使ってもらうことは好きではない。

むしろ嫌いなくらいで。

「もう何も心配しなくていいんだからね?。」

「……うん。」

「私だっているし、あんたの家族も。周りの人も。」

「……うん。」

「もう大丈夫だからね。」

一つ一つの言葉を由佳は、あたしに優しく語りかけた。

あたしを心配をしてくれているのが、表情からも凄く伝わってきて、申し訳ない気持ちで一杯になる。

ごめんね。由佳。

何を言えなくなってしまうたあたしを気遣ってか、由佳は無言でお弁当食べ始めた。

由佳のそれとない気遣いに感謝しながら、あたしもお弁当箱を開け

た。

すると蓋を明けたお弁当には、あたしの大好きなコロツケと炒め物が入っていて。

あたしは何も返せないのに誰からも気を遣ってもらっている気がして余計悲しさがこみ上げてきた。

∴ 思い出すのは、あの記憶。

大好きだったあなたと、空回りばかりしていたあたしの過去。

7：このキモチ（後書き）

…… 本当に更新が遅くなってすみません!!!!
言い訳を言うつもりはありませんが、ここしばらくいろいろありまして、なかなか更新できませんでした……
ゆっくりですが、また少しずつ更新していく予定ですので、完結までお付き合いいただければ、と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8804d/>

擬似恋愛

2010年12月4日04時41分発行